

このゆずを繋ぐために

名人 水口 眞夫・静岡県榛原郡川根本町

聞き手 清見 陽香・茨城県常総学院高等学校1年

■こんにちは

昭和29年、2月12日生まれ。私は水口眞夫、こういう顔(ゆずジュース記事の載った新聞を指さして)(笑)。子どもは無し。兄弟は6人兄弟。生まれたのも育ったのもこの川根本町です。仕事は主にゆず農家と、林業もたまにやる。この家、築180年ぐらいだけど、ずっと変わらずここに住んでてね。性格は、ガキ大将でもないんだけど、ずっと変わらないし、やかましいって言われてた。何事に対しても興味を持って、ここまでやってきました。

小学校は、今は集会場になってるけど、すぐ近くの建物が元小学校。15名ぐらい生徒いただけかあ。中学校は中川根中学校っていう町役場のすぐ近く。そこまで11キロ、30分ぐらいバス通学してたね。高校は寮制の農業高校に行つて、勉強…というか遊んでたね(笑)。

最近では腰が痛いもんで、みんなから「なあんだ後ろから見ると80ぐらい



自身のゆず園の前に立つ水口さん



水口さんのお宅

じゃんか〜」って言われます(笑)。

■家を受け継いで

昔から農業に興味があった訳じゃなくて、我々の世代は子供の時からもう、長男が家を継ぐもんだと言われていて。私も6人兄弟で、女の子5人で育ったもんで、家は継ぐもんだと思ってたし。高等学校卒業した時も、農業やるもんだと思ってて。この畑も、ずっと継がれてきてる。あとは農協とか役場に勤めようか考えた時期もあったけど、まあもともとやってたから農業にそのまま就職した。最初は兼業農家で違う仕事もやってただけだが、やっぱり私自身と農業は昔から合って、私が40ぐらいの頃、親が農業者年金をもらうにあたって家督を移して、そこからは農業一本。茶工場と一緒にやらないかって言われて、それで昭和58年ぐらいにお茶の副業としてなにか始めようって事になって、色んなことやって。例えばキノコやつたりして、それで、ゆずを

植えただよ。ゆず植えた後はハウスも作って。当時、先輩に「お前いくら欲しい？」なんて聞かれてさ、「300万だなく」って言ったら、じゃあこれぐらいだなって言っただけをね、用意して。騙されたよほんとに(笑)。だから副業だね、お茶の。

■ゆずの育て方

ゆずは繊細だな。難しいっちゃゆずか。ゆずはね、種をまいても



接ぎ木した木

さ、30年ぐらい実はずつかないですよ。30年かどうか私もちょっと分かんないだけえがさ、桃栗三年柿八年、ゆずはじゃあ何年だかって言うんだけどさ、ほんとにならないですよ。だけど、接ぎ木をすると、実がすぐなる。昭和60年頃に組合で、飼料袋の中に土入れて、接ぎ木をしたですよ。ゆずは普通、枳殻からせに接ぐ。そうすると、大体2年、3年目から実をつける。たくさんじゃないけどね。だからその、接ぎ木したものを買って、今の場所で育ててる。苗は替えない。

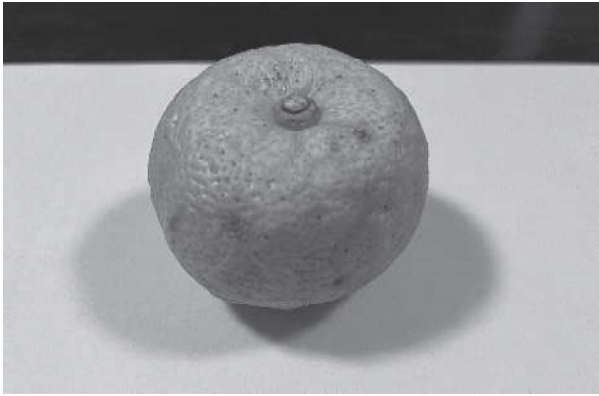
それで、ゆずは11月に収穫するですよ。工程としては、夏の間少し管理して、11月頃から収穫をして、販売してる。私は、12月の冬至に合わせて売って、12月の間に全量売り切っちゃう。1月2月は休みって感じでもないだけえが、ゆつくり過ごして、2月後半から3月にかけてで、手入れを始める。

■繊細なゆずの手入れの仕方

ゆずはウイルスが入ると、こはん症こはんって言って、点が出るだよ。こはん症。黒い点々が出るだよ。それが出るとなかなか、売っていくには厳しいなあ。んで葉っぱがさ、ちぢかむ。葉っぱが縮むっていうか小さい葉っぱになるだけね、実も小さくなる。1回ウイルスが入るともう立ち直らないっちゅうか。その木は1回で終わり。変な言い方だけえが、ウイルスが入るとね、小さい玉になりやすいですよ。小さい玉、片手で丸作った



こはん症に感染したゆず



黒点病に感染したゆず※黒点病とは、黒い斑点が表面に出る病気で、この程度であれば食べても問題ないが、商品として売るのは難しい



真ん中の長い枝が徒長枝

ときぐらい。大きくなってM玉。それぐらいになっちゃう。それを防ぐために手入れをしてるね。

ゆずの手入れはね、所謂剪定つてのやるだよ。木をかなり切る。ほんで、やっぱり葉っぱがたくさんないと、実が大きくなるらないもんで。1つの実にたくさん葉っぱがつくようにする。一応指導じゃ、百枚に一果つて言われてるだよ。たくさん葉っぱがないと、ゆずはたくさんならない、実際。ちなみに切った枝は私は全部外に出す、捨てる。木を切る以外は、日当たりをよくして明るくする。今言った剪定しながら、防除をしていく。暗いところは実の付きも悪いし、黒点病が出やすいだよ。黒い斑点がね、ゆずにつく黒点病。それは雨で感染するもんでさ、今言ったように、除去するっていうか、出す。ゆずは寒さを受けるもんで、剪定は3月頃からやるだけんさ。私はわざと4月頃やるだけんが。ゆずつてすごい再生力が強いもんで、いくらでも出るだよ。それで、3月から4月まで、最初の剪定や

るね。その後、5月6月に新しい枝が出てきて、その新しい枝に、ゆずがなるもんで。あと徒長枝つていうぐーっと伸びる枝があるだけんが、それを、6月頃からとる。7月8月もその繰り返しだね。あとはもう、普通の管理つか防除したり肥料やったりして、あと草を刈ったりして。

■相棒の道具、動物たち

基本的に作業はノコギリと剪定ばさみでやってるだけんね。あと採果ばさみっちゃうのがあって、実を傷つけないように曲がってる。

あと余分な仕事があつてね、鹿とかイノシシが中に入つて荒らすもんで、ネットをね。ここはネットだけんが、向こうは電柵やってるだけんね。猿なんかもいるので、そんですぐそこにいたつて、逃げないださ。鉄砲でも持ってりゃさ、動物も警戒していくだけんね。でも追っ払ったつてね、撃たれないつてこと知ってるもんで。我々はただの人なもんで。あの火薬とかさ、鉄砲持つてる人は匂いがすると思うだよ。その人たちには怖いと思うだけえがあ、我々にはなんにも。全然逃げない。怖くないもんで。人に慣れちゃつて。あとはヒルがいてね、痛くてたまらんですよ。血もついて。まあそういうこともあるだけんが、自然の中で一生懸命、暮らしてます。



手にはカパー、腰にノコギリを提げて



収穫ばさみと収穫したゆずを入れるかご



川根本町愛溢れる作業着

■収穫後、年末前の大仕事

一番大変なのは選別。私一人しかやらないもんで。収穫したゆずを見て、なんでこれダメでこっちは良いんだってという話だよ。目視だもんで、自分の目で見てやるから、なかなかこれは難しい。夜遅くまでやるけんがさ、眠くなりや寝る。それで目開いた時また起きてやろう、ってね(笑)。なにしろたくさんゆずあるもんで。収穫はね、他の人も手伝ってくれるもんで。そのゆずを器に入れてくとき、もう出荷しないと入らなくなっちゃうもんで。選別するときの見分け方は、いろいろあって、傷が全くないやつが、A品。A品は、所謂秀品だよ。ほとんど傷もないじゃん。綺麗なもの。で、さっき言った黒点。商品としては黒点は嫌われてるよ。だから黒点があるのは外すだけだが、市場によっては全然売れるところもあるもんで。そういう仕分けをする。ゆずって、採った分にはすぐくきれ

なのね、はさみ傷とか、トゲ傷、そういうのが後々傷になるかならないかちゅうのが分からな。1週間ぐらいすると、良いの悪いのってのはつきりわかるようになるだけ。そこは長年の経験で、いけそうなやつは置いといたりね。ともかく、基本的には、無傷。ほんで1個、2個まではまあまあ。3個以上から5個までがB品かな。5個ぐらいまでね。これら以外はダメだもんで、もう。

一応組合で目合わせして、それに合わせて出すわけ。ダメなのは家へ戻ってきて、返品になっちゃうよ。これはダメだよ。仲卸さんってのがあってよ、そこに私はゆずをバラの箱で出して、それを向こうで選別して、バック詰めしてくれるよ。それでダメなやつは、家に戻ってきてそっちで何とかしてください。だから100個あっても、2個はダメだとかさ。私の売ってることはそんな感じ。こういう言い方しちゃう悪いかもだけど、ダメなやつは絞ったりなんだりしても消費しきれない。実際ある程度はさ、一生懸命せっかくな作ったものだもんで。ジュースとかね。自分の家で自家消費するために、かなり搾るよ。ただ、一升瓶20本30本搾ってもそんなには、飲み干せないもんで。他に職種も持っているもんで。なかなかね。ゆず専門ではないもんで。お茶もやってるし。それから、山の木も切ってるもんでね。



選別の見分け方の資料 提供：川根本町ゆず組合

■川根のゆずへの思い

3年前、つまり2019年ぐらいに、静大の学生が他の四国とかのゆずと川根本町のゆず、何が違うのかの調査をしただよ。その時に、川根本町のゆずには、他よりも癒しの効果がある香りがあるって。ここ標高540メートルあるけど、ゆずは高いとこだと香りが高い。皮が固く、厚くなる。小さめで香り高いゆずができる。他の地域と、どっちが良いとかはないだけえが、私はやつぱり、一番だなと思ってるよ。



自慢のゆず

■新しいゆずの使い方

ゆず単体だけで売ってくより、ジュースとか、ポン酢とか、加工品みたいのを売って、ある程度……宣伝に使ったらどうかと思ってる。これ、商売にしようとは思わないってかね。こういうの作って、知ってもらって、売ることが大事だよなと思ってる。それでゆずのことを知ってもらって、ゆず農家とか興味持つ人が増えたらいいなっていう。それぐらいしか思っていないよ。あとは、大変な選別もさ、光センサーの機械でやれたら楽でいいよね。そういう話もないこともないんだけど、もし全部はじかれて出てきたらどうしようとかね、怖くてできてなかったりするね。ただ、こういう風に、新しいことやるなら早くやらんとね。発想はあっても、それを実際作り上げるのはまだまだだから。今からだね。

■全国と比較して

ただ加工品とかもね、最初は確かに需要あったけどよ、コロナになってからね？ ガタ落ちだよ、ほんとに。お客も来ないし。売れないっちゃうか。店は閉まっちゃってるし。今はだいたいぶ落ち着いてきたけえが。ゆず自体は、料亭さんで使う凄くいいゆずがなかなか売れない。料亭さんも閉まってるから。あとは、実際に東京で売ろうと思ってるって行っても、「こういうのは全国から来てるから！ もっと安くするとか！」って言われたりね。



ゆずで作ったジュース



ゆずで作った羊羹



ゆずで作ったポン酢

全国的に増えてきたでよ、ゆず農家。九州行ってもそうだし、岐阜の方でもそうだし、みんなそういうもの始めて、だからやっぱり加工品も。一瞬で増えただよ。ちょうど、私らが始めた時、広島に川根ってところあるでよ、そこと一緒になっちゃって。「川根？」なんて言って（笑）。その川根ゆずちゅうのは、商標登録取ったもんで。その時に、これも川根（本町）だもんで、その商品を取ったわけじゃないからね、ほいでこのジュースを作るにあたって、そこら辺が問題になって。特許庁とも相談したけえが、良いんじゃないかなって言われて。訴えられても困るしね、同じ地名で、しかも同時に始めたでよ。で、タイアップして、一緒にやったらどうかっていう話もあったけえが、まだそこまでの力はないし、お金もそんなにあるわけではないし。インターネットも、最初は頑張ってたね、あげたりして、「なんだ広島と一緒にじゃん！」って言ってたけど、なんせ家も電話回線だし、慣れてないもんで難しいよね。

■なかなか進まないし、進めないし

川根本町のゆずの宣伝、何か良いものないかな、どうしたら良いかなって。前々からずっと考えてね。周りからも言われるし。ラジオにも出たり新聞に出たり、色々やってきて、アイディアも、芳香剤にしてみたり、アートのしたり、海外進出って言うてる組合の人もいただけえが。でも後継者もないもんで。手伝いの人はいても、私に言われ



ゆずジュースの新聞記事、上写真の右が水口さん
出典：静岡新聞社、平成 23年 6月 15日 23面

たことしかできないもんで。私抜きで進めることはできん。私も、このまま死んでしまったら何も無いもんで、やっぱり知ってることは教えたいし、覚えたことも繋いでいきたいし。新しい次の代に代わってかないと、私いつまでも生きてるわけじゃないもんで。

お茶の方もね、いまだんどん茶畑が減って、使われない畑は耕作放棄地になってるでよ。ゆずも今はまだ需要が少しはあるだけんが、ここからどうなるかは分からないし。高齢化と後継者不足だよ。その改善のために新しいこと始めたいんだけど、まあそう上手くはいかないだよ。川根本町自体もね、若い人の声が聴こえなくなってる。若くみずみずしい力で引張ってってくれる人がいないと、やっぱり進まないし、進めないし。むしろ逆に、一人でもそういう人がいてくれたら、180度変わると思うでよ。だから、どう宣伝するか、毎晩寝る前に「う〜ん……」って考えて、朝になるだよ。逆に、若い人の意見が聞きたい。教えてほしいでよ。

■まだまだチャレンジ

ゆずにはトゲがあって、採る時も気をつけないと危ないだけんね。私は他のとこの手伝いに行くときは、ヘルメット被って行く。痛いから（笑）。自分のトゲは全然痛くないだけえがね。あ〜針刺されてるな気持ちいいなあって。ほんとほんと。

まあそんな感じで、全部の作業が大変で、そんな嬉しいもんでもないだけえが、やっぱり、採る時、綺麗なゆずだと、「ああ〜!!!これはいいなあ」ってなるだよ。で、やっぱりイマイチなゆずばつかだと、お金にならないもんで。綺麗なゆずを取るために、剪定と、防除と、草刈りと。確実にやっていこうってなるよ。11月に、あ〜今年も最高だなってなるか、あ〜今年もだめだ〜ってなるか。ほんとにとっちかだよ（笑）。たくさん綺麗なものが採れたときは、嬉しくてたまらんね。収穫の時に「やつ

【聞き書きを終えての感想】



初めて取材に伺った日、役場の方の車で山道を登り、自然の中にポツンと建っている水口さんのお宅を見た時、自分の住んでいる場所との違いに新鮮さと緊張を覚えました。

水口さんは笑顔で私を受け入れ、私の質問をうなずきながら聞き、そして悩みながら真摯に自分を語ってくださいました。また、ゆず畑を歩きながら、これは綺麗、これはダメなやつ、これがさっき言った徒長枝……と解説している水口さんからは、ゆずへの愛と自分の仕事への誇りを感じました。1回目の取材で、逆に若い人の意見が聞きたいから、と私に質問をした水口さんは、2回目の取材日には、前に2人で話し合った試作品、と私の名前を彫ったゆずを私に手渡しました。私と話したことを仕事に活かそう、形にしようと本気で考えてくれていたこと、そしてそれをすぐ実行に移す行動力にとっても驚き、水口さんのそんな人間性を深く尊敬しました。

私が聞き書きに参加するきっかけとなった、第一次産業の人手不足問題のリアルを、水口さんは分かりやすく教えてくださいました。また、そういう問題に対し、まだ解決する手段はたくさんあるはずだ、と奮闘する水口さんを見て、私自身も自分の前にある問題に立ち向かっていこうと思うことが出来ました。



profile

水口 眞夫

みずぐちさだお

昭和29年2月12日・69歳

職業：ゆず農家、林業

【略歴】静岡県内一のゆず生産量を誇る川根本町の、代々受け継がれてきた標高540mに位置する自宅近くのゆず畑でゆず栽培をしている。キャリアは約35年。年間の寒暖差や昼夜の気温差を活かした香り高いゆずを育て、大手スーパーへ直接出荷している。地域の組合にも所属し、ゆずを使った加工品の開発やPRにも力を入れ、地域活性化、また高齢化や後継者不足問題の解決を目指している。

た…！」っていうあの感じだね。せつかく買ってくれる人もいるし、私もこの仕事が好きだで、まだまだ続けていきたいとは思うよ。名前で売って、信頼を取ってくまでにはなかなか時間がかかるだろうが、それを楽しみながら、色々やっていきたいね。ダメだ〜ダメだ〜と言ってても、私死んじゃうわけじゃないもんで。まだ生きてるもんで。

その間は何とか、頑張つて、結果は出ないかもしれないが、結果が出るような方法で、色々チャレンジしていきたい。

【取材日…2022年9月17日、10月21日】